

令和3年度秋田県総合政策審議会第1回未来を拓く人づくり部会 会議録

1 日 時 令和3年7月20日(火) 13:15~15:15

2 場 所 県議会棟1F 大会議室

3 出席者

- 委員 佐藤 有加(立志塾RISE講師)
- 豊田 哲也(国際教養大学アジア地域研究連携機構機構長・教授)
- 野崎 一(秋田県PTA連合会事務局長)
- 林 信太郎(秋田大学大学院教育学研究科教授)
- 黒川 匡子(株式会社ゼロニウム取締役)
- 蛭田 一美(聖園学園短期大学准教授)
- 前原 和明(秋田大学教育文化学部准教授)
- 県 石川 政昭(秋田県教育庁 教育次長) ほか関係課室長等

1 開 会

2 あいさつ

(1) 石川教育次長あいさつ

本日は、お忙しい中御出席いただき、感謝申し上げます。また、黒川様、蛭田様、前原様におかれては、委員就任を快くお引き受けいただき、御礼申し上げます。

本部会は、県の施策のうち教育・人づくりの分野について、専門的な立場から調査・審議いただくため、総合政策審議会の内部組織として設置している。

今年度は、県政運営の指針である第3期ふるさと秋田元気創造プランの最終年度となるため、本部会では、次期プランの策定に向けて審議いただくこととなる。

将来の予測が困難な時代の中にあっても、子どもたちが、様々な変化を乗り越えて、たくましく生きていくために必要な資質・能力を育てていくことが必要だと言われている。午前中の会議において「10年後の社会を動かしていくのは、今教育を受けているデジタル世代の子どもたちである」との話があった。こうした背景を踏まえながら策定される次期プランは、これからの本県の教育・人づくりの指針となる重要なものである。

本県では、人口減少・少子高齢化が全国を上回るペースで進んでおり、学校運営のハード・ソフト面において様々な影響を与えている。同時に、社会の在り方が、AIやロボティクスなどの先端技術の高度化により劇的に変わりつつある中、突如現れた新型コロナウイ

ルスが様々な方面に影響を与えており、ポストコロナを見据えたニューノーマルの世界に移行していくことが求められている。教育もまたその渦中にあるので、確かな学力や豊かな心を育てるといふ教育の普遍的なことに加え、カーボン・ニュートラルへやデジタル化への対応など、教育の内容を因数分解しながら、対応や取組を検討していただくことも必要だと考えている。

委員の皆様には、最終的に提言書を作成していただくこととなるが、本部会は3回の開催と、限られた時間での審議となるので、忌憚のない御発言をいただき、有意義なものとなることを願います。

(2) 林部会長あいさつ

本日は、お忙しい中お集まりいただき、感謝申し上げます。

県総合政策審議会の未来を拓く人づくり部会の部会長という大変重い役を引き受け、大変緊張している。

本日午前中に総合政策審議会の本会が開催され、新秋田元気創造プランの方向性について審議された。その中で、デジタル技術の活用やSDGsの理念の推進、人口減少の克服など、様々な目標やプロジェクトが示された。ただ、これらは全てそれを担う人材がいないと絵に描いた餅になってしまう。そういった意味において、私たちの部会は、重要な位置を占めている部会であると認識している。

新年度に向けて、3回の会議で提言をまとめるという、かなり厳しいスケジュールであるが、委員の皆様には忌憚のない御意見をいただきたい。

また、専門委員として新たに参加した3人の委員には、活発な御意見をいただきたい。本部会は、積極的に発言しないと発言のチャンスがないというほど積極的な議論が行われる会なので、どんどん発言するようお願いしたい。

終了時刻はきっちりと守ることとするので、皆様には活発な御議論をお願いしたい。

3 委員の紹介

(出席者名簿に基づき委員を紹介)

4 議 事

◎ 林部会長

議事に入る前に一言申し添える。審議内容は、議事録としてホームページに掲載される。その際、委員名は特に秘匿する必要はないと思うので、公開で行いたいと考えているので、よろしく願います。

それでは、議事に入る。

最初に、議事（１）今年度の未来を拓く人づくり部会の進め方について、事務局から説明をお願いする。

◆ 事務局

部会資料１に基づき説明する。

今年度の未来を拓く人づくり部会は、年３回開催する予定である。

１回目は本日で、今年度の部会の進め方、３期プランの取組等について、新プランの方向性について説明した後、意見交換を行う。２回目は、８月４日に開催し、新プランの取組案について御議論いただいた後、提言書の作成方針について検討を行う。３回目は、９月６日に開催し、皆様の御議論を踏まえて事務局において作成した提言書の素案について御議論いただく。

提言書は、１０月の総合政策審議会においてとりまとめられ、それを元に県において新プランの素案を作成し、年度内に成案を作成するという流れとなる。

◎ 林部会長

今の説明に質問や御意見はないか。

次に、議事（２）と（３）はそれぞれ相互に関連があるので、意見交換はまとめて行うこととし、続けて説明いただきたい。

まず、議事「（２）第３期プランの取組と成果、課題等について」事務局から説明をお願いする。

■ 総務課長

部会資料－２を御覧いただきたい。

「主な取組と成果」であるが、①の「キャリア教育」では、児童生徒と企業をつなぐ職場体験システム「Ａーキャリア」を開設したほか、高校生のインターンシップを推進した。右側のグラフ①「高校生の県内就職率」では平成３０年度まで横ばいだったが、令和元年度に上昇し、２年度も更に上昇する見込みである。

②の「学力の定着」では、少人数学習や「秋田の探究型授業」を推進し、全国学力・学習状況調査でも、調査開始以来、全国トップレベルを維持している。

③の「就学前教育・保育」では、小学校教育との円滑な接続を図る取組を推進し、指導計画の策定率も、２５．７％から８４．０％と、大きく上昇している。

④の「国際交流の推進」では、昨年度はコロナ禍のため中止したが、中国天津市との青少年交流等を行った。

⑤の「インターネット健全利用の促進」では、県内のほぼ全ての中学校区において啓発講座を実施した。

⑥の「学校づくりの推進」では、秋田工業高校の改築や能代科学技術高校の建設等を行

った。

⑦の「高等教育機関の魅力向上」では、国際教養大学において県内高校生を対象にグローバルセミナーを開催したほか、秋田県立大学では、産業構造の変化に対応した人材育成を促進するため学科の再編を行った。

⑧の「世界遺産登録」では、北海道・北東北の縄文遺跡群について、イコモスが勧告を行い、世界遺産登録に向け大きく前進した。

次に、「主な課題」と「今後の対応方針」である。

左と右の数字は対応させているが、①として、高卒者の3年後離職率が依然として高い水準にあることから、職場定着の支援策の強化、離職者に対する情報提供を行っていく。

②として、科学技術の進展や産業構造の変化により地元企業が求める専門性が変化・高度化していることから、工業科や情報等の教員を対象とした研修を実施し、指導スキルの向上を図る。

③として、ベテラン教員の大量退職が続いていることから、若手教員に対する研修や学校訪問指導等を通じて、秋田の探究型授業の一層の推進を図る。

④として、英検等の外部試験の結果によると、生徒の実践的な英語コミュニケーション能力が十分に養われていないことから、イングリッシュキャンプ等を通じて国際理解や英語学習への動機付けを図るとともに、英語コミュニケーション能力を高める授業の在り方について指導助言を行っていく。

⑤として、運動部活動について専門的な指導を求める生徒や保護者のニーズに合った指導体制の構築するため、外部指導者の確保や部活動指導員の配置等を進める。

⑥として、GIGAスクール構想の推進により、1人1台端末の環境は整ったが、その活用は十分に行われていないことから、ICTを活用した授業改善に係る研究や教員研修を行っていく。

⑦として、本県の産業界において成長が期待される分野を担う専門人材の育成ニーズが高まっていることから、県の重点施策分野をはじめとした、県内産業を担う人材育成の取組に対する支援を強化していく。

最後に⑧として、世界遺産等の文化財の保存・活用について、地域住民の参加が不十分であることから、地域住民の愛着と誇りの醸成やガイドの育成、副読本の作成・配布による学校教育への働きかけ等を行っていく。

部会資料2についての説明は、以上である。

◎ 林部会長

続けて「(3) 新あきた元気創造プランの方向性について」事務局から説明をお願いする。

■ 総務課長

部会資料3を御覧いただきたい。

右側、新プラン案の「目指す姿」と「方向性」については、左側の3期プランを踏襲する形で構成しているが、新プラン全体の方針として、3期プランで「施策」としていた部分を「目指す姿」という表現に変えている。

これに伴い、3期プランの「施策5」については、「学びの場づくり」という、手段に係る内容になっていることから、新プラン案では「目指す姿2・確かな学力の育成」に向けた方向性として整理した。また、全体的にタイトルを短くシンプルに表現するよう修正している。

なお、県教育委員会では、教育に関する個別計画である「第3期あきたの教育振興に関する基本計画」を昨年4月からスタートさせており、施策体系も、基本的に同様のスキームとなっている。

内容について、まず、目指す姿1では、「秋田の将来を支える人材の育成」に向け、「キャリア教育の充実」と「専門教育の充実」の2つの方向性を掲げている。

次に、目指す姿2では、「確かな学力の育成」に向け、「秋田の探究型授業の改善と充実」、「特別支援教育の充実」、「就学前教育・保育の充実」、それに、3期プランの「施策5」から持ってきた「教育環境の充実」、「学校・家庭・地域の連携・協働体制の構築」の5つの方向性を掲げている。

目指す姿3では、「グローバル人材の育成」に向け、「英語教育の推進」、「国際教育の充実」、「国際理解の促進による多文化共生社会づくり」の3つの方向性を掲げている。

目指す姿4では、「心と体の育成」に向け、「規範意識や自他を尊重する心を育む教育の推進」、「インクルーシブ教育システムの構築」、「体力の向上と健康増進」の3つの方向性を掲げている。

目指す姿5では、「県内高等教育機関の機能強化」に向け、「多様な資源を活用した教育・研究・社会貢献活動の充実」、「魅力ある大学づくり等による若者の県内定着促進」の2つの方向性を掲げている。

最後、目指す姿6では、「生涯にわたり学び続ける環境の構築」に向け、「多様な学びの場づくりの推進」、「良質な芸術・文化体験機会の充実と文化遺産の保存・活用」の2つの方向性を掲げている。

続いて、部会資料4を御覧いただきたい。この資料には、新プラン案の「目指す姿」と「方向性」ごとに、3期プランにおいて対応している主な取組を記載している。委員の皆様には、これらの取組を参考として、新プランの「目指す姿」と「方向性」を実現するための具体的な方策や取組について、御議論いただきたい。

先ほども申し上げたとおり、県教育委員会では、教育に関する個別計画である「第3期あきたの教育振興に関する基本計画」を、昨年4月から令和6年度までの5年間の計画でスタートさせており、同計画との整合性を図る必要があることから、新プランの施策体系については、基本的に同様のスキームで進めたいと考えているので、よろしく願います。

◎ 林部会長

それでは意見交換に入る。まず前半は、説明内容について確認していただく時間として、後半は、目指す姿一つ一つについて「主な取組」を話し合うという時間としたいと思う。ただ今の事務局の説明内容について、確認や意見があればお願いします。

○ 野崎委員

高卒者の3年後離職率が依然として高いということであるが、これは県内に就職した方か、それとも県外に就職した方も含まれるのか。また、離職理由も把握していれば教えていただきたい。

■ 高校教育課長

資料の33.4%という数字は、平成29年3月に高校を卒業した者の県内事業所における離職率である。全国平均は39.5%であり、県内の離職率は全国より低いが、就職した生徒の3割以上が3年後に離職しているということであり、企業にとっても大変な損失となっているものと認識している。

また、離職理由について、労働局から発表されていないが、高校教育課の独自調査では、「思っていた仕事内容と実際とで若干違いがあった」、「職場内の人間関係がうまくいかない」といった悩みがあるとの報告を受けている。こうしたことも、キャリア教育を進めていく中で改善してまいりたい。

◎ 林部会長

秋田県は、かなり先進的にふるさと教育を進めてきた県だと思うが、新プランの方向性から「ふるさと教育」という言葉が落ちてしまっている。依然として重視しているということで間違いはないか。

■ 教育次長

その通りである。

◎ 林部会長

そういうことあれば、取組に「ふるさと教育」という文言を入れていただきたい。ふるさとへの郷土愛があって初めてふるさとの未来が拓かれるという関係にあると思うので、是非入れていただきたい。

○ 前原委員

特別支援教育についての課題や成果についてあれば、確認したい。例えば、3年後離職

率について、特別支援教育においては、特に高いなどの特筆する事項はあるか。

■ 特別支援教育課長

特別支援学校においても、3年後に3割が離職するという現状にある。一般就職率は全国平均より高いが、離職については高校と同様に課題があるので、在学中、あるいは卒業後も併せて支援するということを進めているところであるが、まだまだ課題が多い。

○ 佐藤委員

1人1台端末の環境が整ったとあるが、現状どのような使われ方をしているのか教えていただきたい。また、昨年度、イングリッシュキャンプの開催が難しかったと思うが、オンラインで開催されたと思われるので、その様子について教えていただきたい。

■ 義務教育課長

小・中学校の生徒には、1人1台端末が全て行き渡っている。今年度からのスタートであり、学校によって差があるが、先行事例によると、子どもたちはすぐに溶け込んでいるが、教師側のICTに関する意識に課題が見受けられる。これから夏季休業に入り、研修が進んでいくので、2学期から本格的に活用が進んでいくものと推察している。

■ 高校教育課長

高校においても、4月から全ての学校に配置されている。各学校によって進み具合が違うが、各家庭への持ち帰りを可能としている学校においては、全ての生徒が家庭に持ち帰って、教師から自宅学習の指示、学校からの連絡等も全てPCで行っている。保護者からも、このような先進的な使い方をするのであればありがたいという意見もいただいているので、できるだけ全ての学校が早期にそのような状態になるような形を採っていただければと考えている。

英語に関しては、対面式のディベートについては、オンラインで行ったり、イングリッシュキャンプについては実際に集まるのが難しかったので、ALTが参加した生徒に手紙を書く「ファンライティング」という取組を行ったりした。生徒からはALTから手紙をもらってとても嬉しかったという声もいただいている。今年度も、生徒の自由な行動とはなかなかいかないが、感染対策を講じながら、できる限りのことをしたいと考えている。

○ 佐藤委員

ICTに関しては進んでいるところは進んでいて、差が大きいということを理解した。

■ 特別支援教育課長

特別支援学校の状況についてもお伝えする。特別支援学校にもタブレット端末が配備

になり、現在、研修も含めて活用を進めているところである。様々な障害を持つ子どもたちがいるので、ICT 機器やアプリを使い、障害があるがために学習が困難であるという状況を打開する意味でも、非常に活用できるツールであると考えている。

また、訪問教育といって、家庭や医療機関から動かせず、学校になかなか来ることのできない子どもたちに対しても、Zoom のような機能を使った遠隔教育を行っている。教室にいるような感覚で参加でき、今後も活用の幅が広がると期待している。

◎ 林部会長

ICT を活用した教育については、私も学校を回ってよく見るのだが、ある小学校では、Zoom を使って東京の講師を呼び、体育館において全生徒で講演を見るという取組を行ったところ、実際に呼んで開催するのと大差ないという感想があったようである。

また、コロナ禍ではグループワークは難しいが、Zoom のグループを使って、声を出さずにグループワークを行う手法があり、共同して同じファイルを作って、45 分の間に発表を行うという取組を行っている学校もあった。

他県にも相当良い取組があるので、是非参考にさせていただきたい。

○ 黒川委員

情報の教員を対象としたプログラミング研修を実施するとあるが、内容について教えていただきたい。

■ 高校教育課長

教科「情報」については、全ての学校で履修している。プログラミング研修に関しては、高度なため私も詳しくないが、各学校で、ドローンやルンバのような掃除機の動かし方を実際にプログラミングすることにより学ぶ、といった形で行っているものと認識している。

なお、今年度の教員採用試験から情報の教員を新たに採用することとしているので、情報教育については、本県においても今後深まっていくものと考えている。

また、総合教育センターにおいて、情報の教員を集めてプログラミング研修を行っている。

◎ 林部会長

それでは、後半の「主な取組」について話し合うこととしたいと思う。部会資料 4 を見ながら、目指す姿ごとにどのような取組が必要かを、1 つの方向性につき 10 分程度を目安に意見交換したいと思う。その過程で、他の資料について質問がある場合、どんどん質問していただいて構わない。

それでは、目指す姿 1「秋田の将来を支える人材の育成」について、3 期プランの主な

取組を参考としつつ、新プランでこういった取組をしたら良いというアイデアがあったらお願いしたい。

◎ 林部会長

何か御意見はないか。それでは、2つ目、3つ目と進みながら、目指す姿1に戻りたいと思うので、次に、目指す姿2「確かな学力の育成」について御意見を願います。

○ 前原委員

私は、特別支援教育や障害のある方への支援ということを専門にしているので、そういった文脈でお話をさせていただきたい。

施策に「一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の充実」が挙げられており、前回も、校内支援体制の機能強化、関係機関との連携、特別支援学校のセンター的機能の充実といったことが書かれている。先ほどの目指す姿1であれば、障害のある方の職業教育の充実といったこととも関連すると思うが、特別支援学校の先生方を中心に、専門性の高い取組をされており、大変貴重なものだと思っている。その一方で、一般学校であれば、例えば高等学校にも障害のある方が在籍するケースもあるが、まだまだ知識やスキルは十分でないと思っている。引き続き特別支援学校の先生方の専門性を高める取組を進めていただきたい。

また、センター的機能ということで、特別支援学校の先生方が地域の学校に教えていくということもされていると思うが、そういった機能も更に充実していけば良いと思っている。

現場の先生方は、恐らく目の前にいる子どもをどう支援していけば良いのかという想いを持っていると思うが、「助けて」という声を上げにくい部分もあると思う。横のつながりでケース検討して、目の前にいる子をどう支援していけば良いのかということを経験のつながりでフラットに対応できれば良い。昨今ではZoomなども活用して幅広く対応できると思うので、横のつながりで問題を意識しあうといったことができれば良いと思うし、もっと特別支援学校の先生方とつながる機会が増えることで連携していったら、場合によっては教育以外の機関とも連携していくことのできる取組ができれば良いと思っている。

◎ 林部会長

3期プランに2つの取組があるが、引き続き載せるべきだという御意見になるか。

○ 前原委員

事前にいただいた資料では、高等学校で研修を受けている先生が少ないようであるが、今後も支援を必要とする生徒は多くなると思う。インクルーシブ教育という観点からす

れば、小・中・高の先生にも障害教育に関する専門性を持っていただくことがお子さんのためにも良いことだと思っている。

◎ 林部会長

目指す姿4にもインクルーシブ教育があるが、今のお話はどちらにつながるのか。

○ 前原委員

目指す姿4にも、先生方の専門性の向上という箇所もあるし、目指す姿2においても、各先生の専門性のつながりを強調する箇所があると思う。ハードとソフトという言い方は変かもしれないが、両輪の面があると捉えている。

○ 蛭田委員

まず、「目指す姿」という表現に変わったことについて、今の時代に合った文言であり、分かりやすく大変良いと感じた。

また、目指す姿2の説明文に「乳幼児期の自発的な活動としての」という表現があるが、「自発的」という文言が「主体的」という文言と似たような意味の言葉であるが、幼児教育の分野においては、「主体的」といった方がしっくり来ると思われる。方向性①にも「他者との関わりを通して主体的に」という言葉があるので、ご検討いただきたい。

次に、「学びに向かう力を育む就学前教育・保育の充実」とあるが、先ほど、主な取組と成果として、指導計画の策定率が平成28年の25.7%から令和2年には84%に上昇したとの説明があった。確かに数字として表れているが、可視化が大事だと言われているために、形に囚われてしまっている印象を受ける。スタート・カリキュラムを作ろうということが重視されて、認定こども園に認定されたときには一生懸命にやるが、2年、3年とやっても、なかなかきちんと活きた質的充実になっていないという現実を感じる。小学校でこれをやらなければならないから幼稚園でこれをやりましょう、中学校でこれをやらなければならないから小学校でこれを、という上から見た取組ではなく、幼稚園なら幼稚園、小学校なら小学校、中学校なら中学校といったように、今でなければできない教育もあると思う。そうしたことがきちんと議論できる「接続」が大事だと思う。目に見える形ではないが、就学前教育・保育を行う時に、小学校の先生方との研修を通して、どんな内容でどういったところを大事にしていくかということを吟味してはどうか。それが本来の質的充実になると思う。

◎ 林部会長

小学校との接続を意識した指導計画の中に、小学校教員と幼稚園教員とのコミュニケーションが入っているのか。

■ 幼保推進課長

指導計画の策定率については、私どもも質的充実を図るべきだと考えていたので、非常に有意義な御意見をいただいた。小学校との学習上の接続に囚われない自発的な活動を重視した上での教育を、幼稚園・保育園・認定こども園等において目指しているの、そのような方向で考えていければと思っている。

◎ 林部会長

新プランの全体のシートには、デジタル化の推進という記載があるが、教育においても重要であるとする。全生徒にタブレットが配備され、それを活用する時代になるが、生徒たちは卒業後、たちまちデジタル化社会に放り込まれてしまう。ICT教育を目指す姿のどの番号にいれば良いか悩むところであるが、ICT教育という言葉はどこかに入れていただきたいと思う。

○ 野崎委員

「学校・家庭・地域の連携・協働体制の構築」に関して、「コミュニティスクール」という名前について広まってきているとは思いますが、実際問題として、学校の中でどれだけ協議されたり、地域にどれだけ浸透したりしているかという、私の感覚としては、本来の意味でのコミュニティスクールとは程遠いものだと感じている。

前原委員からお話のあった「横のつながり」は、今後、本当に大事になっていく部分であり、郷土愛の醸成にもつながるし、離職防止という観点からも横のサポートを連携強化していく部分だと思っている。

そういった意味で「構築」はできている部分だと思うが、しっかりと機能しているのか精査・検証していく、もっと入りこんだ形で学校・家庭・地域が話し合いをしていく必要がある。これがしっかりと機能すると、子どもたちにとって有意義な部分がたくさんあると思うので、絵に描いた餅にならないよう、強化、あるいはしっかりと機能しているか精査・確認する機能を付ける必要があると思っている。

◎ 林部会長

構築がされてきているのであれば、「構築と充実」という表現とし、具体的な取組を「主な取組」に追加していく感じが良いか。是非具体案をご検討いただきたい。

◎ 林部会長

それでは、目指す姿3「グローバル社会で活躍できる人材の育成」について御意見を願います。

◎ 林部会長

中学校、高校で海外の生徒と交流するということが重要になると思うが、何を語るかが決定的に重要である。一つはふるさとの良さであり、郷土教育を進めていくということで、ここは問題ないと思う。もう一つはSDGsであり、どうやってゴールを実現していくかについて意見を持っていない子どもは、恐らく他の意見を持っている子どもと議論できない。新元気プラン全体ではSDGsという文言がかなり出てくるが、SDGs教育について、どうやって行っていくのかお考えをお聞かせいただきたい。

■ 教育次長

言葉としては教育界にも入ってきており、学習指導要領の中にも取り上げられてきているが、どう位置付けていくかについては、庁内でも議論が必要かと思っている。今御意見をいただいたので、十分に検討してまいりたい。

○ 豊田委員

午前中の会議で、知事から小・中・高全てにタブレットを配布し、校内のwi-fi整備も進めているというお話があったが、インターネットへの接続を生かして、海外に小・中・高との交流ということが技術的に可能になるが、今年度、来年度こういったことを行っていくということがあれば教えていただきたい。

■ 高校教育課長

高校では、AKITAグローバルネットワーク事業として、4校を指定して海外との交流を行っている。

○ 豊田委員

4校における交流活動はどの程度行うのか。

■ 高校教育課長

時間数までは把握していないが、SGHの研究発表を活かして交流などを行っているとの報告を受けている。

○ 豊田委員

小学校・中学校についてはどうか。

■ 義務教育課長

市町村によっては、姉妹校との交流といった取組を行っているところもあり、具体的な報告は受けていないが、予定はされているようである。恐らく、Zoomなど技術的な部分が整備されていくと活発化されていくものと思っている。

○ 豊田委員

小学校高学年の英語教育のアクティビティとしては、近所の神社の写真を持ってきて、小学校であればそれほど高度な英語は必要ないので、相手側も片言の英語で対応してくれると、こうやってコミュニケーションが成立するんだということが理解できる。英語が上達するというのも大事であるが、それ以上に、自分が母国語で話すときにあまり意識していない、自分がどういうメッセージを伝えたいのかというコミュニケーションの訓練でもある。小学校高学年では、英語そのものの技術というよりは、コミュニケーションの技術の訓練としてオンラインでの海外との交流への活用可能性を検討していただきたい。

オンラインでの交流の可能性が広がることにより、予算をかけずにできることが増えるので、是非ご活用いただき、市町村の取組を県でベストプラクティスとして紹介するなどして、また、場合によっては、海外の教育委員会に声を掛けてあげるなどすれば、大変良い取組になると思う。

◎ 林部会長

豊田委員の御意見は、英語学習の必要性を感じさせるためにも重要だと思うので、是非進めていただきたい。

今回、ポストコロナも見据えての議論もしなければならない。ICT環境もどんどん整ってきているという状況も踏まえて、今のような提言が出てきたと思う。ポストコロナということも意識して御発言をお願いします。

◎ 林部会長

次に、目指す姿4「豊かな心と健やかな体の育成」について御意見ををお願いします。

○ 前原委員

以前、関東近辺の会社に勤めていたが、都心部に近づくほど多様性が高まる傾向にあり、普通にコンビニに行くと外国の方がいたり、障害のある方がお店で働いていたりという光景を日常的に見ることができる。どうしても地方に行くと接点が無くなる傾向にあるので、共生社会を創っていくということを考えれば、様々な関わりの機会が出てくると良いと思う。特に、大学で特別支援教育を学ぶ学生さんと話をすると、障害のある方に関する前向きな対応や理解は素晴らしいものがある。若い方々がきちんと成長してきており、障害のある方への理解がきちんとある。この点に関しては引き続き進めていただきたいと思うし、地域の中でお子さんが育っていくということを考えれば、地域の方々との交流であるとか、高校を卒業して地域で暮らしているんだけど、あの子誰だろう、ということではなく、あの子も地域の人だから積極的に参加してやりとりしていきましょうという

風土ができるのが大切だと思う。

◎ 林部会長

主に②のところ、3期プランの取組は継続すべきだという御意見と理解した。今の発言を踏まえて、もう少し具体的な内容を付け加えても良いのかなと思うので、ご検討いただきたい。

○ 豊田委員

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、学校においても、マスクの着用、ソーシャルディスタンスの確保、行事の中止など、様々な影響が出ていると思うが、子どもの心の教育への新型コロナウイルスの影響について、どのように評価しているか。

■ 義務教育課長

本県においては感染者数が少ないため、影響は大きくないと感じる。しかし、見方を変えれば、感染した場合に目立つということが懸念される。生徒に対するカウンセリングや家族に対する心のケアが必要だといった声は今のところ聞こえてきていない。ただ、それは我々のところに声が届いていないだけであって、そうした可能性もあるので、あらかじめ道徳の時間や朝や帰りの会の時間など、折に触れて差別などを行わないよう児童生徒に伝えるよう各学校にお願いしている。

○ 蛭田委員

高校に呼ばれて保育の授業を行う機会があるが、マスクをしていると反応が全く違う。顔つきも違うし、返ってくる反応も違う。高校の先生にお聞きしても、同様の意見であった。短大においても同様の変化が見られる。今の2年生は入学式も行っていない。5月過ぎから授業を始めた学生であり、コミュニケーションが全く取れない状態でスタートしている。そういう意味で、今、課長がお話しされたとおり、目に見えていないけれども、そういう状態があるということを踏まえて何ができるのかを考えていかないと、難しい問題であると感じた。

また、インクルーシブ教育について、教育が乳幼児期から一本になってきているということ踏まえると、乳幼児期から、発達に遅れのある方々との交わり場を作っていくということが大事だと思っている。今年、聖園短大で試みとして、北秋田市で、障害児と小・中・高校生が一緒になって町おこしをしていく、そこに短大生が入っていくという取組を行っている。そのような町ぐるみの取組があれば良いと思う。取組としては小さなものだが、そこに关わる人がたくさんいると意識も変わってくると思う。

◎ 林部会長

コミュニティスクールが関わってくると、そういったことも実現可能かと思う。

○ 佐藤委員

①について、前原委員の発言を聞いていて、「自他を尊重する心を育む」というところに、多様性を理解するというか、様々な関わりの機会が重要であると感じた。インクルーシブ教育にひっくるめて考えても良いかと思うが、様々な関わりがあって、そこには国際理解や、コミュニティスクールなど地域における世代間の交流も含まれると思うが、そういう交流があって他者を理解することで自他を尊重する心を育むことができるのではないかと思うので、様々な関わりや交流の機会といったものを大切にするような取組があったら良いと思う。実際に会えなくても、リモートでも良いと思う。

○ 豊田委員

世の中は全てオンラインになっていて、タブレットも行き渡り、wi-fi も強化されている。今までよりも通信環境が良くなっているので、この機会に、県内の小学校あるいは中学校間の授業の交流を是非ご検討いただきたい。例えば、研究発表会を、一つの学校の中で完結させないで、小規模校であれば他の小規模校と行ったり、大規模校でも学校の中で縦割りにしてしまっていて、例えば、鹿角と由利本荘と仙北の小学校の6年1組同士で合同発表会を行って、1組同士で研究グループにするなどして行ったりすることが考えられる。元々広い県なので、他の地域のことはあまりよく知らないということもあると思われる。小学校においては、時間も限られるが総合的な学習の時間もあるので、全く交流の無い県内の他の小学校とのオンラインを活用した交流に使ってほしい。

◎ 林部会長

オンライン交流は是非進めていただきたい。若い先生であれば、ICT を軽く使いこなすので、どこかでモデルになるような授業をしていただいて、それを紹介する形で進めていただくとスムーズに広がると思うので、是非お願いしたい。

それから、今回「多様性」という言葉が資料のどこにも出てこないと思うが、多様性を尊重する態度は国際交流にも必要だし、日常的にも必要である。LGBT の方もかなりのパーセンテージでいると思われる。そういった方々への理解ということも大事だと思うので、「多様性を尊重する」という言葉をどこかに入れていただきたい。

◎ 林部会長

次に、目指す姿5「地域社会と産業の活性化に資する県内高等教育機関の機能強化」について、御意見をお願いしたい。目指す姿5は、主に県立の大学に関する目標であると思うが、豊田委員、何か御意見はないか。

○ 豊田委員

県内の大学はどこも疲弊していると思う。国際教養大学は、本来留学が必須の大学であるが、行うことができず、外国人留学生も来ない状況である。国際教養大学はほぼ全ての留学生がキャンパスに住んで、外国人とキャンパス内で交流するし、在学4年間のうち1年間は海外で過ごすというプログラムであるが、まずキャンパスに住めない。授業はオンラインで、外国人留学生は、オンライン授業の中にすらない。海外への留学もできない。非常にまずい状況にある。

他の大学においても、対面授業はできても、マスク越しの授業は本来の意味での対面授業ではないので、学生同士の活発な議論を奨励できる雰囲気になく、全体的に意気消沈している状況にある。大学はどこも苦しい状況にあるので、是非ご支援をお願いします。

◎ 林部会長

目指す姿5の目標は普遍的なもので、是非進めていかなければならないものであると思うので、この通りで良いと思う。

◎ 林部会長

次に、目標6「生涯にわたり学び続ける環境の構築」に進みたい。御意見をお願いしたい。

○ 前原委員

私は、秋田大学の障害者の生涯学習の担当をしているが、大変重要な取組だと思っている。障害のある方の社会参加の目標が「就職」となるのは、悲しいことだと思っている。障害のある方であっても、きちんと学んで、世の中の見え方がより良く見えるような取組は大変重要だと思っている。

秋田大学では、障害のある方がより専門的な知識を身に付けたり、社会の見え方が変わったというところを目指している。多様な学びの場づくりの推進につなげていければと思っている。

◎ 林部会長

多様な学びの場づくりの推進に「障害者の生涯学習の推進」を入れておく必要があるということではよろしいか。

○ 佐藤委員

障害者の生涯学習の推進について、私自身、生涯学習センターの講座にも参加してみたが、障害者向けではなく、多様な学習機会の提供という中で、障害者もそうでない方も一緒に取り組めるような形で生涯学習を推進していただければ良いと思う。

◎ 林部会長

講師の力量による部分が大きいと思う。バリアフリーに対応した授業を行っている講師であれば対応できると思うが、相当気を遣う必要があり、実際にやってみると難しい。

○ 黒川委員

デジタル分野に関しては、どんな世代の方もこれから先逃れることのできない環境であると思うので、生涯学習にデジタル分野の学習も意識していただくと良いと思う。

◎ 林部会長

デジタル分野は重要であるので、是非活発化させていただければと思う。

○ 蛭田委員

主な取組に「生涯を通じた読書活動の推進」とあるが、具体的な取組を教えてください。

■ 生涯学習課長

読書活動の推進については、学校については生涯学習課で、県民全体については総合政策課で取り組んでいる。

学校については、子どもの発達段階に応じた取組を行っている。小学生では、例えばポップ作りを行って読書についての興味を持ってもらうとか、中・高生では、ビブリオバトルを毎年開催しており、本の魅力を発信することで自分自身の力にするとともに、周りに影響を与えるということを行っている。

人材育成としては、高校生等を対象に、読書の楽しさを伝える人材を育成する読み聞かせボランティア講座を開催している。

■ 読書活動推進監

総合政策課では、大きい取組として、ふるさと秋田文学賞があり、秋田を題材とした小説やエッセイを募集し、受賞作を4編を収めた作品集を刊行している。毎年、表彰式、及び合わせて実施している、イベントを行っていたが、去年は中止となり、また今年も行わない。今年度は過去の文学賞作品を題材とした動画を作成しSNSに掲載し、閲覧いただくことにより読書に興味を持ってもらおうという取組を行っている。

また、読んだッチリレーということで、県内の皆様から読まなくなった絵本や児童書をご提供いただき、保育所等に10冊、20冊とお渡しするという、いわゆるリサイクル文庫の取組も行っている。

◎ 林部会長

それでは、目指す姿1「秋田の将来を支える人材の育成」に戻って、御意見をいただきたい。

○ 前原委員

前回までは、障害のある方への職業教育の充実ということで、ご説明にもあったとおり、障害のある方においても職場定着率の低さや離職率の高さがあり、次の職場も見つけるのもなかなか難しいし、見つかったとしても慣れるまでに時間がかかるということも考えると、職場定着させるということが大事であり、そういう意味でも、引き続き職業教育を充実させていくことが大切であると思っている。

あわせて、一般企業や地方公共団体が障害のある方をきちんと雇用して、一緒に働いていく仲間としていくシステムを構築することが重要である。

また、障害のある方へのテレワーク支援が増えてきているということを考えると、ICTを活用した何らかの訓練や教育というものが重要となると考える。ICT化により都会の本社の仕事を地方の秋田でもできるといったこともあると思うので、テレワークの導入の取組も重要であると思う。

◎ 林部会長

ICT教育が各分野にあって、どこに入れ込めば良いか悩むが、秋田の将来を支える人材の育成ということからすると、ICTの技術は必須なので、ここが一番関係が深いのかなと思っている。

また、質問であるが、前のプランでは「科学技術」が入っていたと思うが、どうなるか。

◆ 事務局

今回、「施策」が「目指す姿」となり、体系を変えた関係で、方向性についても改めて見直して整理・統合している。部会資料3のとおり、3期プランの施策2・方向性5については、新プランの目指す姿1・方向性2の「専門教育の充実」の中に「科学技術人材の育成」として取り込まれていきつつ、矢印は記載していないが、目指す姿2の学力の育成にも理数教育の取組が取り込まれていくこととなる。いずれ、新プランにおいても、「主な取組」として出てくることとなる。

◎ 林部会長

了解した。是非、取組の中に入れていきたい。というのも、今日の佐竹知事のお話に「科学技術」という言葉が2回も出てきており、相当重視しているということが分かるし、科学技術を持った人材が秋田の将来を発展させるという意味では間違いのないと思うので、是非入れ込んでいただければと思う。

○ 黒川委員

方向性2に関して、当社では、公立の高校でCGの授業を十数年行っているが、社会人講師として関わらせていただいているので、その時々最新の状態をできるだけ生徒に伝えるように、教える内容についてもできるだけ学校の先生に御協力いただき、内容をその時々合ったものにスライドするようにしている。10年前と違うのは、個人でできる範囲とクオリティが格段に広く、深くなった。その分、地域課題の解決に主体的に向かっていく力を学習の中で身に付けることを授業の中で期待して行っている。ただ、私たちのように、定期的に長く関わらせていただいているというのは異例のことなので、民間のブローカーの技術者の力を活用していただきたいということを常々思っているところである。

◎ 林部会長

目指す姿1のICT教育は、将来ICTビジネスで起業する際に絶対に必要であるし、どこの会社に行っても必要になる技術である。本県産業界が求める技術でもあると思うので、是非入れ込んでいただければと思う。

ICTに関しては、目指す姿3のグローバル人材の育成にも関連してくるので、目指す姿1と3に入れ込むこととなるだろうか。

○ 蛭田委員

主な取組に「きめ細かな就職支援と職場定着の促進」とあるが、保育者の離職についても3年後が一つの壁であり、その後10年続くと安定する傾向にある。3年後にアンケートを行うと、仕事自体に対しては大きなやりがいを感じているが、人間関係や、育児休業制度や給与の面など雇用面で課題があるようである。当部会だけの問題ではなく、全体で考えなければならぬ大きい問題であると感じる。

■ 高校教育課長

我々も、職場定着支援員、また、各学校に就職支援員を配置しており、就職後の労働環境・雇用環境についても生徒に学ばせているが、3年後離職率の3割という数字は、なかなか変わらない。高校でのキャリア教育も当然であるが、賃金の低さや休日の少なさといったこともあり、子どもたちももう少し良い職場に就職したいということがあると思う。そうした中であっても、働く意義ややりがいを持っていただきたいということを思いながら指導している。保育士になりたいという生徒もたくさんいるので、当初の目標を達成し、更に頑張れるような心を養っていきたい。

○ 蛭田委員

キャリア教育について、短大において、多様な職種の方を招いて授業を行うことがある

が、そこから学ぶことは非常に多い。体験的な活動の推進といったときに、秋田にいる人材を生かすことができるような取組ができれば良いと思う。即戦力事業のお陰で、色々な職種の方をお招きすることができたが、非常に良い取組となった。

また、高大接続の改革について、今は、中・高・大の流れがとても大きい気がしている。高校生のオープンキャンパスは行われているが、中学生向けのオープンキャンパスについても、大学づくりにおいて必要ではないかと感じている。

◎ 林部会長

部会長同士が議論する企画部会というのもあり、他の部会との協議をすることができるので、他の部会に関わることにしても是非積極的に発言いただきたい。

○ 佐藤委員

離職率が高い水準にあることに関して、高校を卒業してすぐの子どもたちに対する対応はしっかり行っていると感じるが、例えば、生涯学習の中で、職場の中の人がどう新人を育てていくのかということについても学ぶ機会があれば良いと感じた。

○ 豊田委員

第1期の元気創造プランから引用すると「小・中学校においては、各学校のふるさと教育の一環として郷土の産業やそれらに従事する人々に直接触れる体験活動等が行われており、中学校では9割以上の生徒が職場体験を実施しています。今後、さらに、生き方指導及び勤労観、職業観を育てる教育の充実に取り組んでいきます。」といったことが書いてある。我々の先輩方もその時々で精一杯考えていた訳で、新プランを考える際に前提条件が変わっていないことについては、やる内容はあまり変わらないと思う。キャリア教育についても、年々改善されている部分はあると思うが、それは細かい部分であって、大筋については、前提条件が変わらないので、変わる訳が無いと思っている。

では、この10年間で、日本全体、秋田で何が変わったかということ、特にこの1～2年、ICT技術が大きく進展した。黒川委員からもご指摘があったとおり、10年前は個人でできることはものすごく限られていたが、今は、ICTを少し使っただけで本当に精緻な動画を作成することができる。

私、今日、遅れて参加したのは、午後から会議室をお借りして日本国憲法のオンラインの授業をしていたからであるが、今日の授業の課題は75分間で春学期に学んだ日本国憲法の課題を5グループに一つずつ与えて、2分以内でプロモーションムービーを作るという課題を与えた。今時の大学では、もちろん内容は憲法であったり、国際法であったり、日本史であったりするが、アウトプットを短時間で動画で作成する。ツールは、Xbox Tool Bar、Quick Time Player、デフォルトのアプリ等を使わせている。全体としての生産性を上げていくためには、ICT技術を読み書きと同じく浸透させていく必要がある。したがっ

て、ICT は全てに関わることである。

前提条件の変化としては、東アジアの中で日本の地位が相対的に低下したなどといったこともあると思うが、大きいのは ICT 技術の進展である。

目指す姿 1 については、「社会の変化と要請に応える専門教育の充実」ももちろん大切であるが、「社会で活躍する基礎的能力としての ICT 能力の涵養」ということは、文言はともかく、入れてほしい。また、今まで以上に小・中学校の先生にとってはプレッシャーとなるが、今の子どもたちは ICT を活用できなければ、将来食べていけないよということ浸透させていく必要がある。

目指す姿 2 については、日本全体で遅れていることであるが、韓国や中国、オーストラリアでは、教育の中での ICT 技術の活用ということが進んでいる。ICT の活用とは、PC やタブレットを使うということよりも、遠くとつながりながら刺激を受けながら学ぶことができるということである。ICT 環境やリモート環境を生かした新しい時代の教育を探していかなければならない。具体的には、先ほど申し上げた小規模校での授業内容の充実、大規模校でも普段と異なるメンバーでの教育交流、研究発表会を合同で行うことにより教育の質を高めていくという取組である。今までできなかったことができる仕組みがあるので、それを無視してはいけないと思う。

目指す姿 3 については、目指す姿 2 とも深く関わるが、ICT を使うことにより、まずは県内での交流、あるいは東京・大阪との交流を深めて、その延長として海外との交流を展開していく。大上段に構えて、いきなりオーストラリアと交流するのではなく、もっと気軽に、小学生のうちから、無料でタイの生徒と八幡神社の話ができるね、といったようなことをやっていただければ、これから大きく変わっていく社会に向けて準備させることができる。

目指す姿 4 については、インクルーシブ教育の不足を ICT で補う。視覚障害者では難しいと思うが、聴覚障害者の場合は、チャットを使ってオンライン授業を行うことができる。

目指す姿 5 については、午前中の会議の終わりに知事とも雑談したが、コロナ禍でみんながみんな苦しんでいる訳ではなく、儲かっているところは儲かっている。アメリカの Zoom や Netflix が儲かっているのはもちろん、国内でも通販に力を入れているところは儲かっている。しかし、秋田の産業においては、良い物を持っていて、日本酒なんかももっと伸びるはずなのに、通販ができない。WEB サイトを作るのに、外注しなければならないので、お金がかかる。もし 20 年前に秋田の教育において、ICT 教育にもっと力を入れていたら、今の 30 代、40 代の人たちが wix などを使って 2～3 時間で WEB サイトを簡単に作って、日本酒を国内あるいは海外に売り込むことができたかもしれないのに、我々はそれをやらなかった。理系の教育が必要といっても、精密工学のような昔ながらの理系というよりは、理系的な考え方、JavaScript を書けるまではいかなくても、プログラミング的な考え方のちょっとしたコツのようなものを小・中・高を通じて、経験の中で、授業やクラブ活動の実践の中で養っていくべきだと考える。

目指す姿6については、生涯学習においてオンラインによる授業の提供というのは非常に大きな意味があり、今までは社会人の方が大学に来ようと思っても、時間が無いから定年退職しないと来られなかった。オンラインで授業が提供されれば、例えば午後6時からであればスマホから授業に参加しても良いし、今までよりもICTにより生涯学習の可能性は広がっている。ICT技術の発達、低廉化、普及によって広がった可能性を捕まえていくことだ。

これは、部会長に対するコメントであるが、ICTがどこに入るかではなく、全てに入るべきであると思う。それ以外については、10年前と変わらないはずである。第1期プランが根本的に間違っているはずがないと思う。

◎ 林部会長

ICTについて、全ての目指す姿に入れるということは、私も賛成である。ICTの活用により取組が著しく進行するものがあるので、入れ込んでいきたいと思う。特に生涯学習については、ICTを使おうという雰囲気にはなりにくいので、教育委員会主導で進めていきたいと思う。

それでは、出るべき意見は出尽くしたと思われるので、第1回の審議はここまでにしたい。事務局には本日の議論を整理していただいた上で、次回、更に議論を深めていくこととしたい。

5 閉会

(以上)